

2 宇部の中世はどのような時代だろうか

◎学習課題

- ・このころ宇部を支配していたのはだれだろう？そして、その人物は、時代の変化の中でどのような行動をとっているだろう？

		宇部のできごと	歴史上のおもなできごと
12世紀	古代	1179●厚東武光が霜降城を築く 1184●厚東武光、平氏側で源氏と戦う 1185●厚東武光、源義経に船を差し出す 厚東一族が長門各地の地頭になる	大寺院が勢いをふるう 荘園・公領が広がる 1156■保元の乱、平治の乱(59) 1167■平清盛が太政大臣になる 1185■平氏亡びる 源頼朝が守護・地頭の設置を認められる 1192■源頼朝が征夷大将軍になる
		鎌倉時代	1221●厚東武景、鎌倉(または京都)で没す 1281●厚東武仲・大内弘貞が元軍と戦う
13世紀	中世	1333●厚東武実、長門国内の幕府軍と苦戦の末勝利し、後醍醐天皇より長門の守護に任じられる 南北朝の争いの中で、厚東氏が 大内氏にほろぼされる 1363●大内弘世が北朝から周防・長門の守護に任じられる 1392●大内義弘が6か国の守護になる	1333■鎌倉幕府ほろびる 建武の新政 1336■南北朝に分かれ、対立する 1338■足利尊氏が征夷大将軍になる 倭寇が高麗や明の沿岸をおそう 1378■足利義満が幕府を室町に移す 1392■南朝と北朝が統一される
		南北朝時代	1404■日明貿易(勘合貿易)始まる 1467●大内政弘、応仁の乱に西軍として参加し京都で戦う 大内氏が朝鮮や明との貿易で大きな経済力をもつ 大内氏が中国地方から北九州を支配する有力な戦国大名になる
14世紀	近世	室町時代	北山文化
15世紀		戦国時代	東山文化

中世の宇部をながめるポイント

大内氏の家臣、杉氏の居城
信田ノ丸城があった場所
です。この南部の地区は、今
でも城南とよばれています。

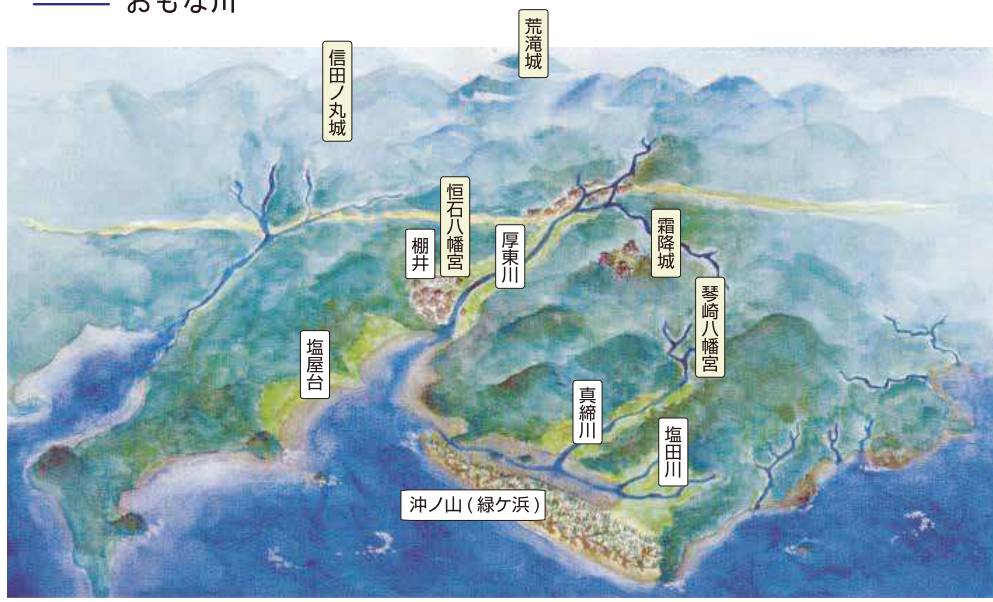
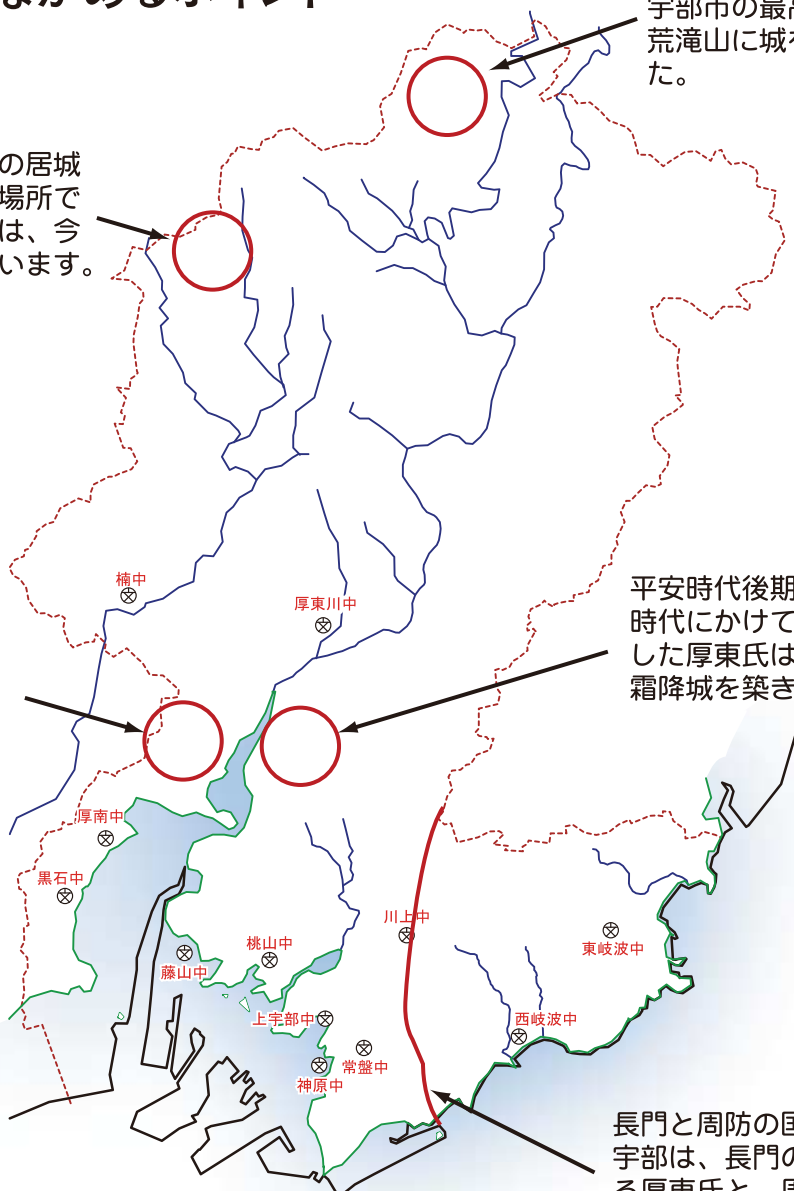
大内氏の家臣、内藤氏は、
宇部市の最高峰（459m）
荒滝山に城を構えていま
した。

厚東氏は、霜降城の
麓の厚東川の対岸に
あたる棚井に館を構
えていました。

平安時代後期から南北朝
時代にかけて宇部を支配
した厚東氏は、霜降山に
霜降城を築きました。

- 現在の市境
- 現在の海岸線
- 中世終わりころの
海岸線（推定）
- おもな川

長門と周防の国境にあたる
宇部は、長門の有力者である
厚東氏と、周防の有力者
大内氏の激戦の地でした。



このころ、厚東川
や真締川が運んできた
土砂が、潮の流れによ
って細長い砂州「沖ノ
山」をつくりました。
後の時代には沖の山に
松が植林され「緑ヶ浜
」とも呼ばれました。
海岸沿いでは、塩田で
塩をつくっていた所も
あり、塩田川や塩屋台
などの地名にも残って
います。

作画 中山美由紀

(1) 源平の争いと厚東氏

平安時代の終わりごろ、保元の乱・平治の乱をきっかけにして、武士が政治の上で大きな力をふるうようになりました。平清盛は武士としてはじめて太政大臣となり、平氏が朝廷の政治を思うままに動かしました。そういった平氏への反感が高まる中、諸国の源氏の武士が兵を挙げました。こうした動きの中、宇部周辺を支配していた厚東氏はどうしていたのでしょうか。

西日本の武士の多くは平氏にしたがいました。このときの厚東氏を率いていたのは7代目の厚東^{たけみつ}武光でしたが、武光は屋敷から厚東川の対岸にあたる霜降山^{しもふりやま}(250.2m)に霜降城を築き、一ノ谷(神戸市)の戦いの時には平氏の側にかけて、源義経と戦いました。

ところが、源氏によって平氏が追いつめられ、壇ノ浦(下関市)で最後の戦いが始まるわずか3日前、武光は源義経に船を12艘^{そう}差し出しています。もはや平氏の滅亡はさけられないと考え、源氏の家来になったのでしょうか。その後、厚東氏は鎌倉幕府の御家人として、一族が厚東郡周辺各地の荘園や公領の地頭に任じられています。

(2) 承久の乱と厚東氏

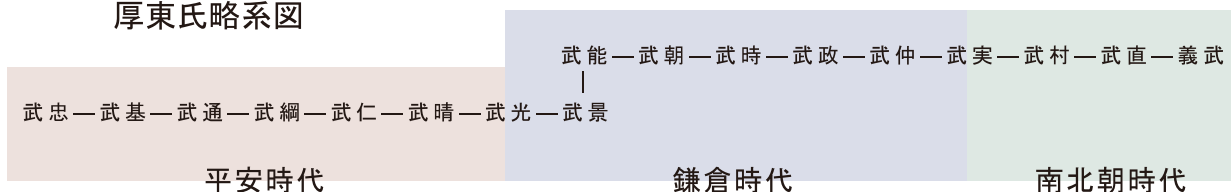
源氏の将軍が3代で絶えると、後鳥羽上皇^{ごとうじょうこう}は、1221(承久3)年、鎌倉幕府の執権、北条義時を討つ命令を全国に下しました。これに対して、鎌倉幕府で実権をにぎっていた北条政子は、「亡き頼朝公の御恩を忘れたのか!」という有名な演説をし、御家人たちに対して、上皇軍と戦うよう呼びかけました。この時、厚東氏の8代目、厚東^{たかかげ}武景はどうしたと思いますか。

確かな史料はないのですが、厚東武景は承久のころ京都または鎌倉で死んだという記録があります。おそらく、武景はこの時上皇側につき、敗北し殺されたのだと思われます。

もともと西日本は平氏の勢力が強く、この時、長門の守護をしていた佐々木広綱も、源氏がつくった鎌倉幕府をあまりよく思っていなかったようです。佐々木広綱が上皇側につくと、厚東武景も鎌倉幕府に反旗をひるがえしたのではないのでしょうか。

これによって、いったん厚東氏はほろび、厚東氏が支配していた領地は幕府に取り上げられた形になりました。ところが、すぐに厚東武景の弟、厚東^{たけよし}武能が9代目として厚東氏をつぎ、領地も取り戻しました。上皇側についた武士の領地には、新しい地頭が置かれることが多かったのですが、幸運にも厚東氏は、領地を失いませんでした。

厚東氏略系図



(3) 元寇と厚東氏

鎌倉時代中ごろ、元軍は2度にわたって日本に攻め入りました。これを元寇とよんでいます。

最初は1274(文永11)年、元軍は対馬・壱岐をおそい、博多湾に上陸しました。集団戦法とすぐれた火器により、さんざん日本軍を悩ませたすえ、元軍は引き上げていきましたが、また襲来するおそれがありました。

文永の役の翌年、元の皇帝フビライの使者が長門国の室津(豊浦町)に上陸しました。日本に対して、元に従うよう伝えに来たのです。幕府はこの使者を鎌倉で殺しました。北九州とともに長門国の防備を固める必要がありました。

長門国では海岸に「長門石築地」が築かれました。萩のあたりから下関あたりにかけて、九州沿岸と同じように石塁を築いたのです。また、長門国の守護として幕府の執権、北条時宗の弟、北条宗頼がやって来ました。そして、この時から長門国の守護は、長門・周防両国の御家人を統率することになり、「長門探題」とよばれるようになりました。

1281(弘安4)年、ついに元軍が2度目の襲来を開始しました。このとき元軍の一部は、長門国の沿岸をおそいましたが、長門探題率いる長門・周防の武士の前に、上陸を果たせませんでした。厚東氏13代、厚東武仲も大活躍し、その後九州での苦戦が伝えられると、周防の有力な武士、大内弘貞とともにかけつけ、九州でも戦ったようです。

この戦いによって、長門国では厚東氏、周防国では大内氏が、もっとも有力な武士として認められるようになりました。

(4) 鎌倉幕府の滅亡と厚東氏

元寇以来、鎌倉幕府の基礎がゆらぎ始めました。政治の失敗が続き、幕府の実権をにぎる北条氏に対して、御家人の中にも不満がつのっていきました。

後醍醐天皇を中心とした倒幕計画が進む中、長門探題北条時直率いる、長門・周防の御家人たちは、京都周辺や瀬戸内海で幕府に反抗する勢力と戦いました。厚東氏の14代目、厚東武実も最初は幕府側として戦っていましたが、やがて他の長門国内の武士をさそって、幕府を倒す側につきました。戦いは苦戦を強いられ、一時は霜降城をあげわたすこともありましたが、足利尊氏と新田義貞によって幕府がほろびたという知らせが入ると、北条時直を中心として幕府側で戦っていた武士たちは降伏しました。

その後、後醍醐天皇による建武の新政がはじまり、厚東武実も天皇から長門国の守護に任じられました。厚東氏がついに長門全体の支配者になったのです。

右の絵は、武実が館のあった棚井に建立した東隆寺に残る武実の画像です。



厚東武実画像(東隆寺蔵)

(5) 南北朝時代の始まりと厚東氏

建武の新政に失望した武士たちは、足利尊氏を中心として立ち上がりました。朝廷はふたつに分かれ、両朝は全国の武士に味方するようによびかけて戦ったため、動乱は約60年近くも続きました。厚東氏は、この時どうしたのでしょうか。

後醍醐天皇から長門の守護に任じられていた厚東武実は、最初は南朝側として足利尊氏と戦う新田義貞に協力していましたが、やがて尊氏の側につく決意をしました。そして、今度は北朝から長門国守護に任じられました。

しかし、隣の周防国では南朝側の大内氏が勢力を伸ばし、九州でも南朝側が優勢でした。厚東氏は、そういった中で北朝側として戦い続けました。

南北朝時代の典型的な山城とされる霜降城は、霜降山の4つの峰の頂上に、前城・中ノ城・本城・後城が造られていました。前城には長さ50mの空濠、本城には長さ40mの空濠と土塁、後城には階段状の地形などが現在も残っており、南北朝時代の戦乱のようすをしのばせています。



霜降山



空濠・土塁（本城）

(6) 厚東氏の滅亡と大内氏の発展

南北朝時代、長門では北朝側の厚東氏が守護として力をもっていました。となりの周防では、南朝側についた大内氏がしだいに勢力をのぼし、周防の守護であった鷲頭氏をほろぼし、さらに長門に攻めてきました。

大内氏は、もともと周防の国府の役人で、鎌倉時代に幕府の御家人として力をつけました。元寇の時には、周防各地で地頭をつとめる一族をまとめ、長門や九州で戦いました。南北朝時代になると、北朝側についていたのですが、もともと同じ一族の鷲頭氏が北朝側として守護になったのに対抗して、南朝側につき周防国での実権を奪おうとしたのでした。

厚東氏17代、厚東義武は大内弘世の攻撃を防ぎきれず、霜降城は落城、厚東氏はほろびました。大内弘世は、すぐに北朝側に転じ、1363年、北朝から周防・長門の守護に任じられました。大内氏はその後、約200年間、山口を城下町とし、中国地方から北九州を支配する守護大名・戦国大名として成長していきました。

大内氏は数カ国の守護を兼ね、幕府の有力守護大名のひとりであったため、京都にいたことが多かったようです。そのため、大内氏は、支配する各国に守護代を中心とした武士による支配のしくみをつくりました。宇部一帯を支配した大内氏の家来は、内藤氏や杉氏でしたが、内藤氏は荒滝山（459m、吉部にある宇部市の最高峰）に荒滝城を、杉氏は奥万倉に信田ノ丸城を築きました。

コラム

宗隣寺の庭園「龍心庭」りゅうしんてい

宗隣寺そうりんじ（小串）は、1670（寛文10）年、江戸時代に宇部村を支配していた福原氏ふくはらの菩提寺ぼだいじとして建てられたお寺です。江戸時代の初めごろにできたお寺ですが、「龍心庭」りゅうしんていとよばれるその庭園は、南北朝時代のものであることが、1968（昭和43）年の調査でわかりました。

宗隣寺が建てられる前に、この地には普濟寺ふざいじという禅宗のお寺がありました。奈良時代に唐から渡ってきた為光いこうという僧が建てたお寺だという言い伝えがありますが、この普濟寺時代の庭園が龍心庭なのです。

この龍心庭は、大小2つの池を連結し、8つの「夜泊石」よどまりいしを配置、池辺には「干潟様」ひがたようという潮の干満をあらわすつくりがほどこされています。これは、全国でも2つしか例がないそうです。また、足利尊氏が京都に建てた常在光寺の庭園とよく似ていることも注目されています。山口県最古の庭園として高い価値が認められているこの庭は、現在、国の名勝に指定されています。



山口で大内氏による大内文化が花開く直前、宇部にもこういったすばらしい文化の担い手がいました。

(7) 大内氏の滅亡と毛利氏

戦国時代といえは下剋上げこくじょうの世の中、その下剋上のひとつの大きな例が大内氏の滅亡でした。中国地方から北九州にかけてを支配し、外国との貿易によって経済力を持ち、「西の京」とよばれた山口を中心に大内文化を花開かせた大内氏が、家臣すえの陶氏にほろぼされたのです。

陶晴賢すえはるかたは、7カ国の守護をつとめる戦国大名、大内義隆よしたかから周防の守護代をまかされていた大内氏の有力な家臣のひとりでした。ところが、家臣同士の争いをきっかけにして主君と対立し、1551（天文20）年、ついに大内義隆を攻め、自殺に追いやりました。

陶晴賢は、その後、豊後の国から大内義長（大内義隆の姉の子）をつれてきて大内氏をつがせ、自分が実権をにぎりました。しかし、その陶晴賢も、毛利氏によってほろぼされたのです。

毛利氏は、源頼朝の家臣で鎌倉幕府の成立に深く関わった大江広元を祖先とし、南北朝時代に入ると安芸の国（広島県西部）に移住し、やがて大内氏の家臣として力をのばしました。毛利元就りもとなりは、陶晴賢が大内氏をうったあと、しばらくは陶氏に従っていましたが、1555（弘治元）年、安芸の厳島いつくしまで陶氏をうち倒しました。

その後、毛利氏は織田信長と対立しましたが、豊臣秀吉の政権のもと、中国地方8カ国、112万石を支配する大大名へと成長していきました。